

いっ しき い せき  
一 色 遺 跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財  
包蔵地緊急発掘調査報告書

1996・3

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市は、自然的条件に恵まれ、また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺しています。鼎地区では、縄文時代草創期以来各所に先人達がとどめた足跡が刻まれており、縄文時代中期以降大規模な集落が多数営まれています。また、中世には松尾城に拠った小笠原氏の勢力伸長の基盤となる等、重要な役割を果たした地域のひとつといえます。これらの文化財は私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できるかぎり現状の姿のままで後世に残し伝えることが今に生きる私たちの責務であります。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活のさまざまな場面で、文化財の保護と開発という相容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることも止むを得ないものといえましょう。

一方、近年飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、周辺地区の道路環境の整備が進みつつある状況と相まって、市街地周辺へ企業や住宅が拡散しつつあります。この鼎地区においても、飯田バイパスの一部と市道運動公園通りが開通して以来、沿線への店舗・事業所等の進出が相次いでおり、この度の開発もこうした傾向の一環にあります。飯伊地方の経済活動の振興を考えますとこうした開発も是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることもやむを得ないものといえます。

調査の結果は本書のとおりであります、これまで周辺で積み重ねられてきた調査成果にさらに重要な知見を加えたわけであります。すなわち、地域の歴史解明が進むとともに、ひいては古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った株式会社アライド信州ならびに地元の方々、現地作業および整理作業に従事された作業員の方々ほか関係各位に、深甚なる謝意を申し述べつゝ刊行の辞とする次第であります。

平成8年3月

飯田市教育委員会  
教育長 小林恭之助

## 例　　言

1. 本書は株式会社アライド信州の店舗建設に伴い実施された、飯田市鼎一色428番地ほかの埋蔵文化財包蔵地一色遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、開発主体者である株式会社アライド信州からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成6年2月7・8・18日に試掘調査を実施し、本調査を平成6年6月22日～7月27日に行なった。統いて平成7年度に整理作業及び報告書作成作業を行なった。
4. 現地での調査実施にあたり、調査区設定・写真測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり一貫して、遺跡略号 I SK に調査位置の地番428を付して使用した。今次調査地点は一般国道153号飯田バイパス路線の調査地点と近接しており、連続する遺構番号を付した。
6. 本報告書の記載順は遺構の種別を優先した。遺構図は遺構観察表と併せ挿図とし、遺物および写真図版は本文末に一括した。なお、各遺構については、以下のとおり略号を使用した。

S A (棚列等) S B (竪穴住居址・竪穴等) S D (溝址・溝状址) S I (集石)  
S K (土坑) S M (方形周溝墓等) S T (掘立柱建物址等) S X (その他)
7. 本書は馬場保之が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行なった。
8. 本書に掲載された図面類の整理・遺物実測は馬場および整理作業員があたった。また、遺物写真撮影の一部を株式会社ジャステックに委託実施した。
9. 本書の編集は、飯田市教育委員会の責任のもとに、馬場が行なった。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現は『恒川遺跡群』（飯田市教育委員会 1986）に準拠し、それ以外の表現として、節理面を斜線で表現した。
12. 本書に関連する出土遺物および記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

## 本 文 目 次

序	
例言	
目次	
第Ⅰ章 経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	3
第Ⅲ章 調査結果	8
第1節 調査位置・調査区の設定	8
第2節 遺構と遺物	8
第IV章 まとめ	26
引用・参考文献	28
抄録	44

## 付 図 目 次

付図 1	遺構全体図
付図 2	I SK428 および周辺調査地点遺構分布

## 挿 図 目 次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2	調査位置および周辺地図	6
挿図 3	基準メッシュ図区画調査位置	9
挿図 4	調査範囲	10
挿図 5	S B 08	11

挿図 6	S T01・02 .....	12
挿図 7	S A01・02、SK03～08 .....	13
挿図 8	S D29・30・34・36・37 .....	14
挿図 9	S D31～33・35・38 .....	15
挿図10	周辺柱穴平面図(1) .....	17
挿図11	周辺柱穴平面図(2) .....	18
挿図12	周辺柱穴平面図(3) .....	19
挿図13	周辺柱穴平面図(4) .....	20
挿図14	周辺柱穴平面図(5) .....	21
挿図15	周辺柱穴平面図(6) .....	22
挿図16	周辺柱穴平面図(7) .....	23
挿図17	周辺柱穴平面図(8) .....	24
挿図18	周辺柱穴平面図(9) .....	25

### 図 版 目 次

第1図	S B08、SK08出土遺物 .....	29
第2図	SK05・08、SD32・37、遺構外出土遺物 .....	30

### 表 目 次

表1	S B08 .....	11
表2	遺構観察表 .....	16

### 写真図版目次

図版1	一色遺跡調査区全景 .....	32
図版2	S B08 同炉址 .....	33

図版3	S T01 S T02 .....	34
図版4	S A01 S A01・02 .....	35
図版5	S K05遺物出土状態 同断面 同掘り方 .....	36
図版6	S K08 S D29・34 .....	37
図版7	S D32 S D36 .....	38
図版8	S D37 小柱穴群 .....	39
図版9	重機作業風景 発掘作業風景 .....	40
図版10	発掘作業風景 委託測量作業 .....	41
図版11	S B08 .....	42
図版12	S B08 S K05 .....	43

# 第Ⅰ章 経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

長野県南安曇郡豊科町大字豊科4272番地10 株式会社アライド信州 代表取締役 市川洋一より、飯田市鼎一色418-1における物販店舗建設の計画が提示された。計画地は、一般国道153号飯田バイパス沿線に位置し、バイパス開通以後開発が進展しつつある地域の一画にあたる。また、道路環境が整備されつつあることや旧市街地での事業所・住宅の過密化に伴ない、事業計画地周辺では急速に宅地化が進行している。

一方、当該地は埋蔵文化財包蔵地一色遺跡の一画に位置し、バイパス建設に先立ち緊急発掘調査が実施された地点に隣接する。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居址5棟・方形周溝墓2基、中世の竪穴住居址2棟・方形窓穴（近年になり住居であることが判明してきた。）1基・溝址28条が検出されている。事業計画地においても遺構・遺物の分布が予想された。

そこで、事業主体者・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が保護協議を実施した。その結果、文化財保護の立場からすると現状保存が望ましいが、事業の性格や周辺に及ぼす波及効果等を考慮するとその建設は止むを得ず、試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

平成6年2月7・8・18日、試掘調査を実施した。その結果、Cトレンチにおいて弥生時代後期の竪穴住居址1棟が確認され、Cトレンチにかかる建物部分について本発掘調査実施が必要であると判断された。

諸協議に基づいて、平成6年6月20日、株式会社アライド信州と飯田市長 田中秀典との間で委・受託契約を締結し、発掘調査を飯田市教育委員会が実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

発掘調査の委・受託契約に基づいて、平成6年6月22日現地調査に着手した。建物建設部分について重機により表土剥ぎを行ない、続いて作業員による調査を開始した。調査区のほぼ全面にわたって竪穴住居址等の遺構が分布しており、これらについて検出作業に統いて掘り下げを行なった。基準点測量・写真測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託実施し、全体および個別の写真撮影・補足の測量調査を行ない、7月27日、現地における作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・写真撮影および本報告書作成を平成7年度にかけて行なった。

### 第3節 調査組織

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助  
調査主任 小林正春  
調査担当者 馬場保之・福澤好晃  
調査員 佐々木嘉和・山下誠一・吉川 豊・吉川金利・伊藤尚志・下平博行  
作業員 新井幸子・新井ゆり子・池田幸子・伊坪 節・井上恵資・太田沢男・奥村栄子  
金井照子・金子正子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子・櫛原亞紀子  
櫛原勝子・熊谷義章・小池千津子・小平不二子・小林千枝・斎藤千里・斎藤徳子  
柳原政夫・佐々木文茂・佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐藤知代子・塙沢 節  
清水三郎・下井正俊・代田和登・菅沼和加子・鈴木尊子・閔島真由美・瀬古郁保  
竹本常子・田中 薫・塚原次郎・中島佳寿子・中島 正・中島真弓・仲田昭平  
丹羽由美・服部光男・樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・古根素子・細田七郎  
牧内喜久子・牧内八代・松下成司・松下直市・松下真幸・松下光利・松島直美  
松村かつみ・松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森藤美知子・柳沢謙二  
山田康夫・吉川悦子・吉川和夫・吉川紀美子・吉川正実・吉沢佐紀子

指導 長野県教育委員会

#### 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田 穆 (社会教育課長)

小林正春 ( " 文化係長)

吉川 豊 ( " 文化係)

山下誠一 ( " " )

馬場保之 ( " " )

吉川金利 ( " " )

福澤好晃 ( " " )

伊藤尚志 ( " " )

下平博行 ( " " )

岡田茂子 ( " 社会教育係)

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

鼎地区は昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。鼎地区は飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、南東側は松尾地区と上郷地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。鼎地区的場合、微地形の変化はあるものの、飯田松川に平行する段丘地形上に立地し、基本的には3つの段丘面により構成される。上位の段丘では標高500m前後に笠松山系から発達した扇状地形の末端（扇端）があり、これより以西は伊賀良地区、以東が鼎地区となっている。

一色遺跡が位置している一色地籍は、鼎地区的最上位段丘上にあり、伊賀良北方地籍と接している。中央アルプスの笠松山麓から発達した扇状地が終息し段丘面に移行する付近で、天竜川の小支流気賀沢川による浸蝕谷が始まり、飯田松川に面した段丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地基部付近が一色地籍で、その東方は名古熊地籍となる。標高500m前後で形成され始めた舌状台地の幅は約300mである。台地の中央部付近は東西方向にやや低く凹み、湿地帯を成している。両側の段丘崖に近い部分約100mずつが乾燥した台地で、中央の約100mが湿地である。台地上は全面に強い粘質のローム層が分布しており、自然の風水害に対しては安定した地形条件下にあるといえる。

一色遺跡はこの一色地籍の中央に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地の続きであり、伊賀良西の原地籍に接する。南西側は気賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間がやや小高い微高地で、中央から北東と南西に緩やかに傾斜している。調査区の南西側は台地北東緩斜面にあたる。中央付近の凹地は湿地化しており、遺構の分布も散漫である。さらに調査区の北東側部分は、幅の狭い微高地が南東方向に展開すると考えられ、堅穴住居址が1棟検出された。調査区外北東側は、試掘調査の結果ローム層が分布するものの広範に湿地化しており、遺構等は検出されなかった。地表から50~100cmでローム面に達し、検出調査した遺構はローム面に掘り込まれている。

以上のように、一色遺跡は台地中央に位置し、乾燥した場所であると同時に、すぐ近くに湿地があり、生活・生産を営むのに適した場所といえる。

### 第2節 歴史環境

鼎地区における埋蔵文化財包蔵地は松川氾濫原および段丘崖部を除くほぼ全域に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、代田、山岸、天伯A、天伯B、猿小場、矢高原・八幡原、黒河内、田



1. 一色遺跡 2. 代田遺跡 3. 山岸遺跡 4. 天伯A遺跡 5. 天伯B遺跡  
 6. 猿小場遺跡 7. 矢高原遺跡 8. 八幡原遺跡 9. 黒河内遺跡 10. 田井座遺跡  
 11. 名古熊下遺跡 12. 六反畑遺跡 13. 日向田遺跡 14. 柳添遺跡 15. 物見塚古墳

插図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

井座・一色・名古熊下、六反畠、日向田、柳添の各遺跡と天伯1・2号古墳、物見塚古墳がある。

こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代までさかのぼる。断片的な資料ではあるが、天伯B・猿小場遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、地区内全域に遺跡の存在することが確認されている。しかし、その内容はそれぞれの時期によって異なっている。天伯A遺跡・六反畠遺跡等では押型文土器片の出土が在り、早期・前期の遺跡・遺物の分布は複数の遺跡で認められるが、集落址の調査例は前期初頭の堅穴住居址が6棟調査された田井座遺跡に限られる。定着・安定した遺跡の姿を捉えることができるようになるのは、続く中期になってからである。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落が分布しており、これまでに天伯A・柳添遺跡等が調査されている。後期・晩期になると遺跡数・規模とも減じ、猿小場・山岸・六反畠遺跡で断片的に調査されているにすぎず、具体的な状況は不明である。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてではなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。該期の集落展開としては、中・低位段丘崖下の湧水線および低位段丘中央に発達する湿地帯を利用した水田経営と中位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。後期前半では猿小場・山岸遺跡で住居址が調査されている。後期後半になると、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるものの、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という大きく2つの類型がみられる。前者は低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は中位段丘面から扇状地上に多く、田井座遺跡があげられる。それは前述の基盤となる生業形態の相違と関わるものと考えられる。田井座遺跡では、後期前半に小規模な集落が始まり、後半期に一定規模の集落として安定した姿をみせ、弥生時代の終焉とともに集落も廃絶したことが判明している。

古墳時代の様相は、前期にあたる状況がほとんど不明であり、わずかに、山岸遺跡にその一端をうかがえる程度であるが、後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸・天伯B・六反畠・黒河内遺跡がある。またこの時代の集落址以外の特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には現在消滅したものを含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は前期に属する物見塚古墳、後期の天伯1号・2号古墳がある。物見塚古墳は、竜丘兼清塚古墳や松尾妙前大塚古墳等とともに当地方における初現期の古墳であり、埋葬施設として割竹形木棺の痕跡が確認されている。当地方では初めて、埋葬後に墳丘が構築された古墳であることが確認され、方形周溝墓の構築方法との関連が注目される。また、周溝内からは殉葬されたと考えられる馬の臼歯や骨が出土しており、当地方最古の殉葬馬と考えられている。隣接する松尾地区では、平成5年度に調査された一般国道153号飯田バイパス路線内の茶柄山9号古墳では、周溝内から8基の土坑に馬が殉葬され、また、茶柄山2号古墳でも三環鈴が装着された状態で殉葬されたと考えられる馬臼歯が土壤内から出土しているなど、古墳時代以降馬の生産が物見塚古墳周辺の八幡原地籍で行なわれたことを示唆する状況証拠が揃いつつある。

奈良時代の鼎地区的状況は不明であるが、古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降、隣接する松尾・伊賀良地区において、東山道の経路および「育良駅」の所在地、莊園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、当地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。



挿図2 調査位置および周辺地図

平安時代の集落址は地区内全域に分布し、猿小場遺跡では9世紀後半を中心に25軒と多くの住居址が検出されている。しかし、一般的には遺跡単位では住居址は少なく、むしろ散在する分布状態をみせて いる。この他、猿小場・矢高原遺跡では、竪穴住居址から子持勾玉が出土している。また、日向田遺跡では平安時代後期の住居址から墨書き土器が出土しており、前述の伊賀良地区等との関連が暗示される。なお平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出され、猿小場遺跡では16軒の住居址が調査されている。そこには集落の安定・継続した姿を読み取ることができる。田井座遺跡では、工房址と考えられる方形竪穴1がある。竪穴内に大きな穴が4基掘り込まれており、このうち3基が一線に並ぶ。うち1基からは常滑大甕が出土し、形態等から文永寺石室五輪塔下部から出土した12世紀代の常滑大甕との類似性が指摘されている。この時期の大甕が畿内を中心として納経容器やその外容器として用いられた例が多いことからすれば、相当希少であったことは想像に難くない。この他、田井座遺跡では、本遺跡と同様、溝址と小柱穴群が調査されており、中世前半の居館の可能性が指摘されて いる。

室町時代には伊賀良庄地頭を引き継いだ小笠原氏が隆盛を極め、戦国時代には鈴岡・松尾城にその居が置かれた。本遺跡の他、名古熊下遺跡には、松尾南の原遺跡・飯田城跡等で多く調査されている方形竪穴があり、小笠原氏の勢力伸長の基盤として本遺跡周辺が大きな役割を果たしたことが窺われる。伊賀良庄の発展から小笠原氏の勢力伸長といった中世史の脈絡の中で重要な役割を果たした地域であると いうことができる。

以上、鼎地区の遺跡を中心に各時代を概観した。古来重要な役割を果たした地域といえる。

## 第Ⅲ章 調査結果

### 第1節 調査位置・調査区の設定

試掘結果に基づいて、事業予定地のうち、南西側の建物部分について、調査区を設定した。

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて株式会社ジャステックに委託実施した（基準メッシュ図の区画方法については、飯田市教育委員会 1996 『三尋石遺跡 三尋石（II）遺跡』参照）。

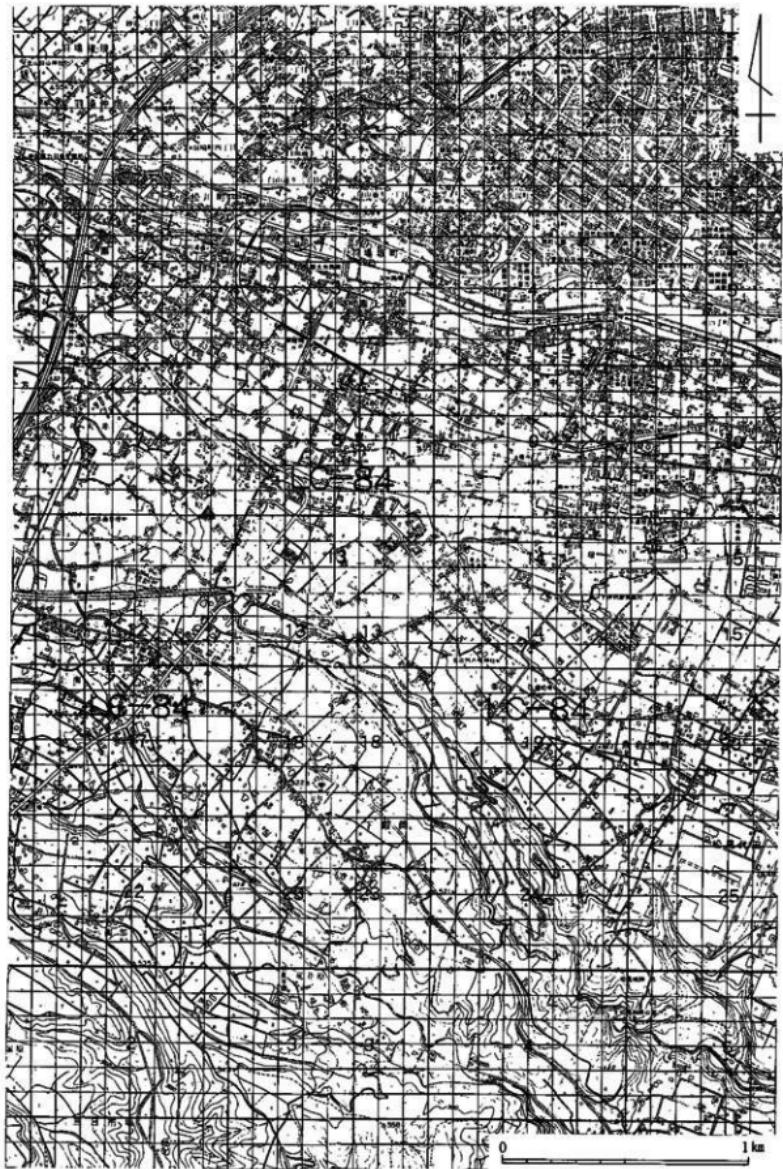
調査地点は、LC-84 13-6、同13-7、同13-14、同13-15内に位置する（挿図3）。LC-84 13-6をI区、同13-7をII区、同13-14をIII区、同13-15をIV区と略することにする。

### 第2節 遺構と遺物

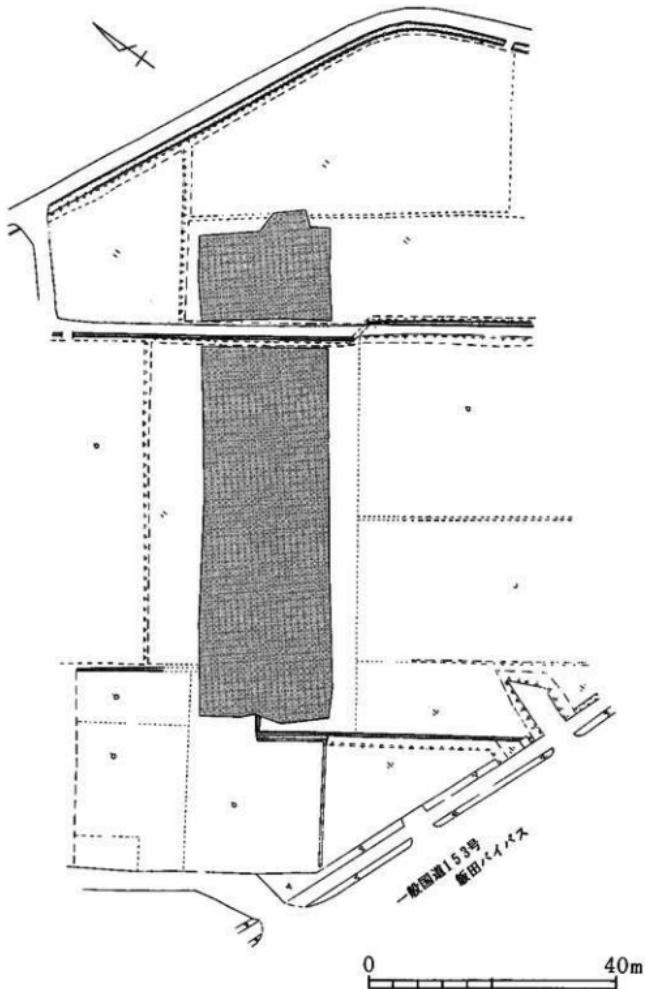
検出された遺構は、以下のとおりである。

SA	2基
SB	1棟
SD	10条
SK	6基
ST	2棟
小柱穴	多数

出土遺物は、SB08・SK05からの遺物の他、遺構外からの陶磁器片の出土が多い。



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置



挿図4 調査範囲

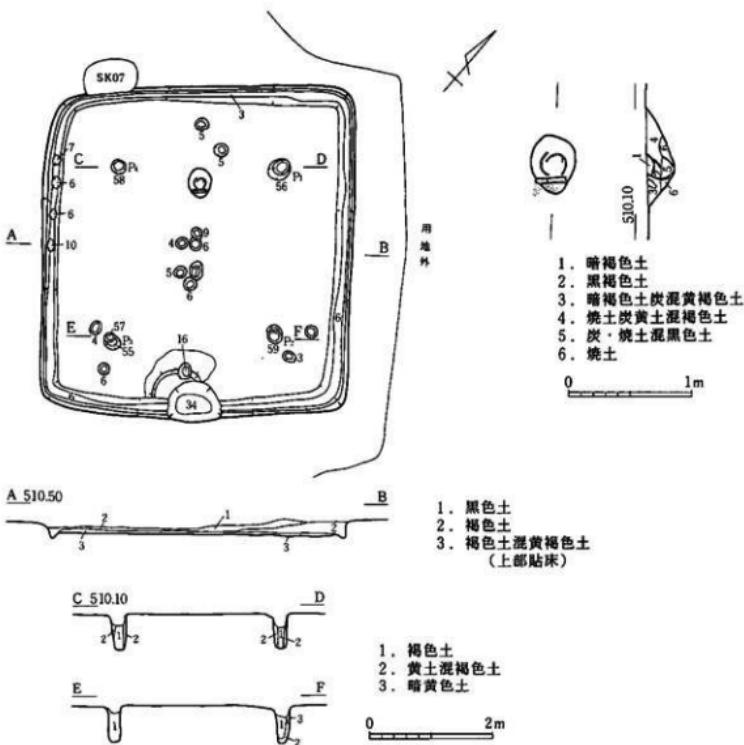
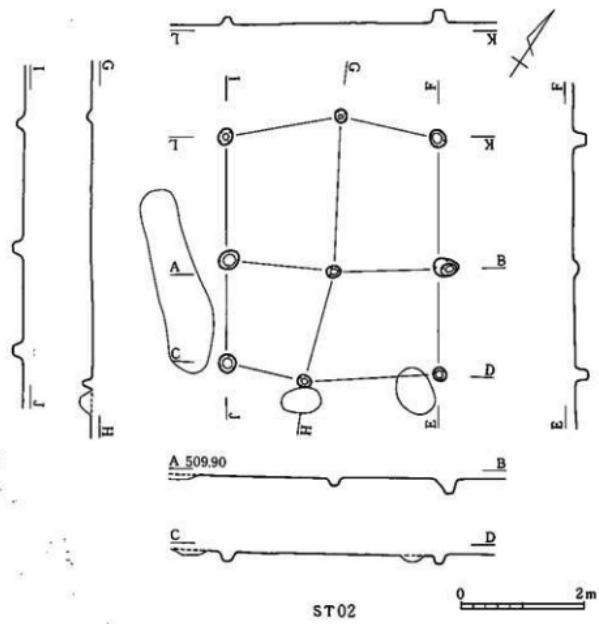
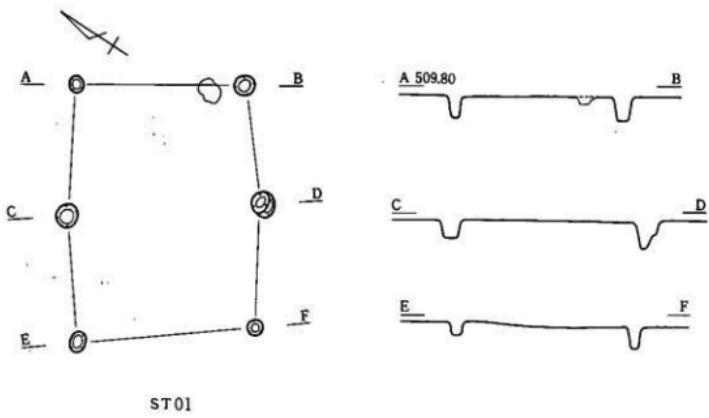


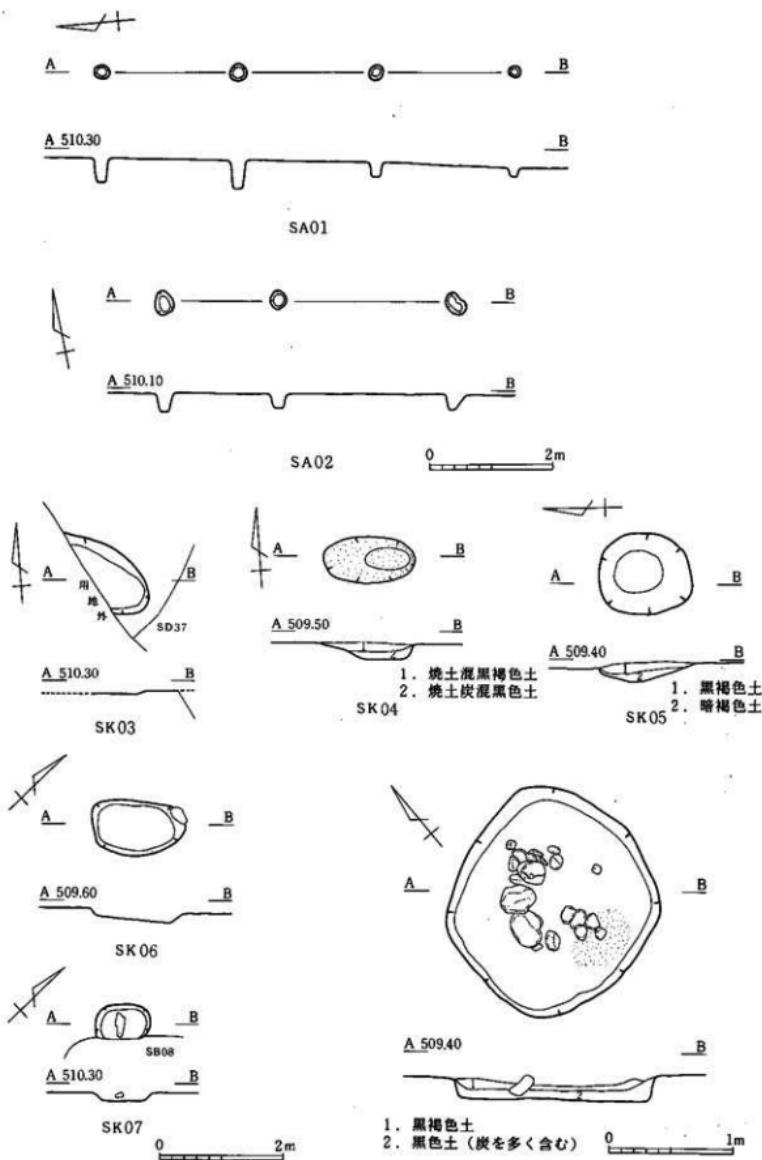
図5 SB08

遺構番号	S B08	時期弥生時代後期前～後葉検出位置 II A S 28	平面形 方形
規 模	530×500×25cm	主軸 N40° W 埋土 上漆黒土・下褐色土。自然埋没と考えられる。	
検出状況	埋土が地山と明確に異なり、明確に検出された。		
新旧関係	S K07に切られる。		
壁	明確であり、ほぼ垂直に立ち上がる。		
主柱穴	4本検出され、P2・P3は近接して主柱穴があり、ほぼ同位置で建て替えられたと思われる。		
周溝	ほぼ全周。土留材の痕跡はなく、また自然埋没であることから、排水の溝と考えられる。		
炉	土器埋設炉。炉縁石を伴う。南側旧炉・北側新炉。炉体土器…旧炉は底部欠損。		
付属施設	南東壁中央壁際に入り口施設あり。土手状縁部を伴い、この付近で有肩扁形石器出土。		
床	全体的に硬く締まった貼り床があり、その下位にもう1面の床面あり。		
その他	床面・炉・主柱穴の状況から建て替えがなされたと考えられる。遺物出土少量。床直		

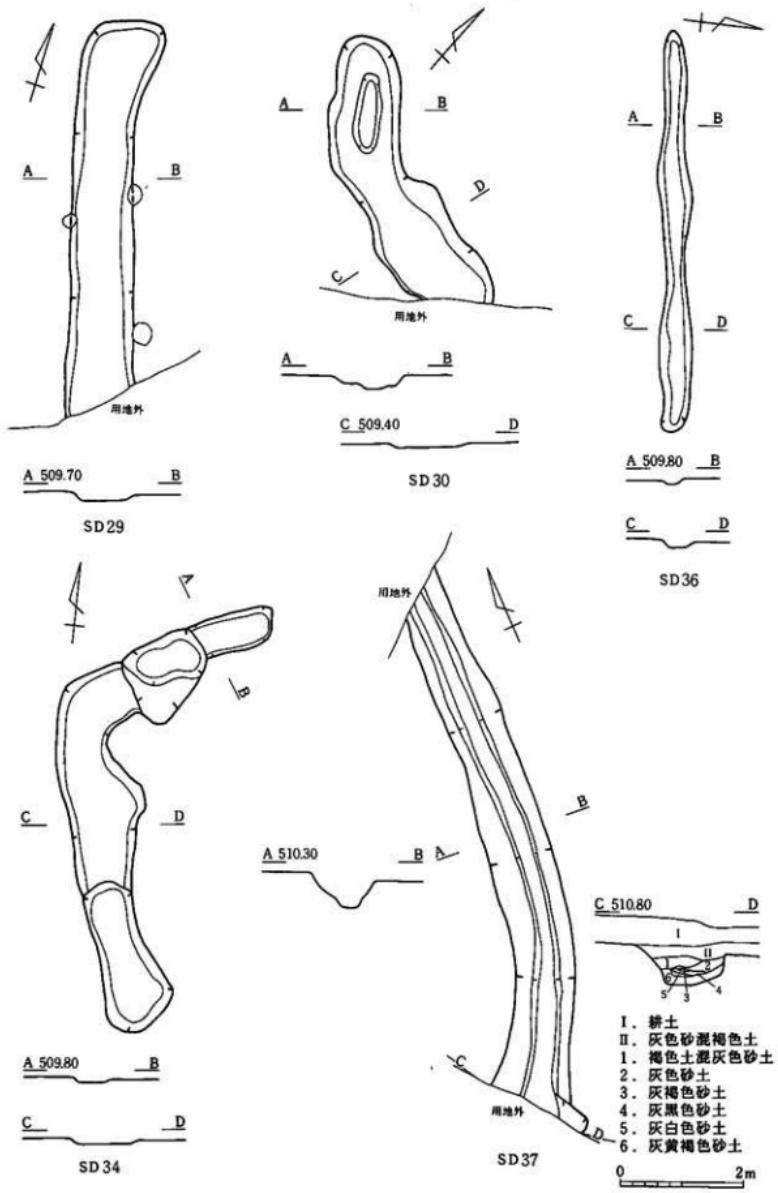
表1 SB08



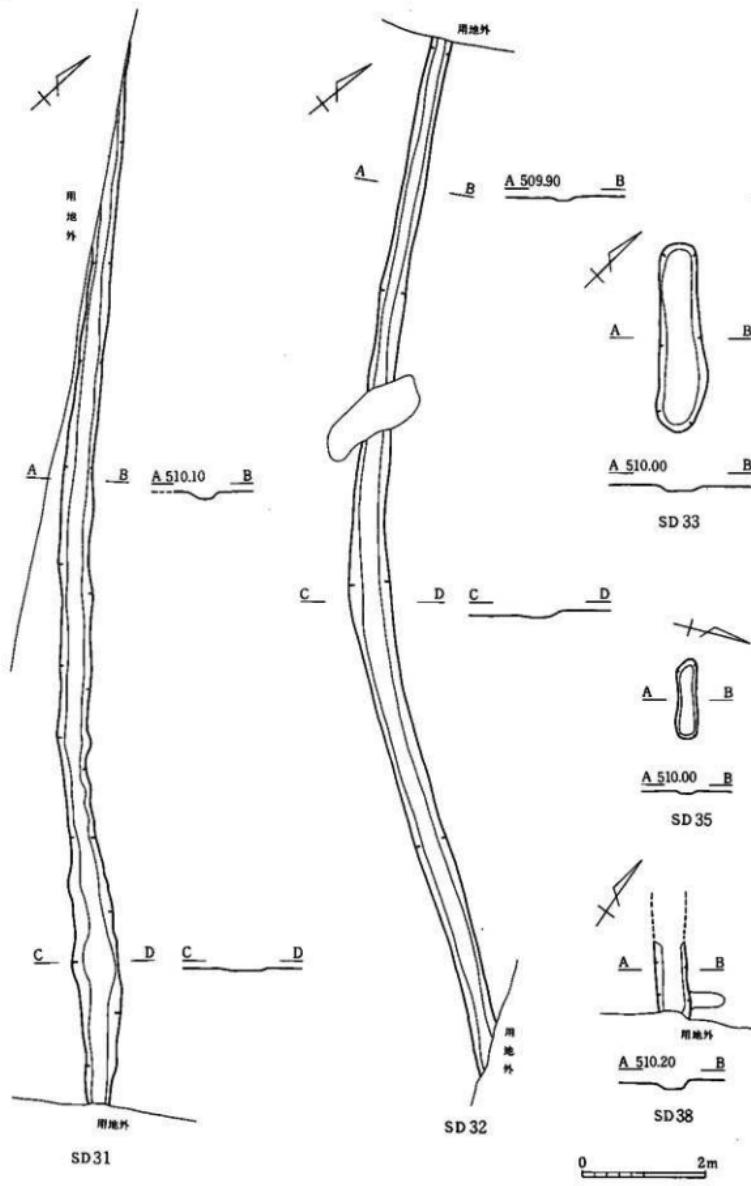
插図6 ST01・02



插図 7 SA01・02, SK03~08



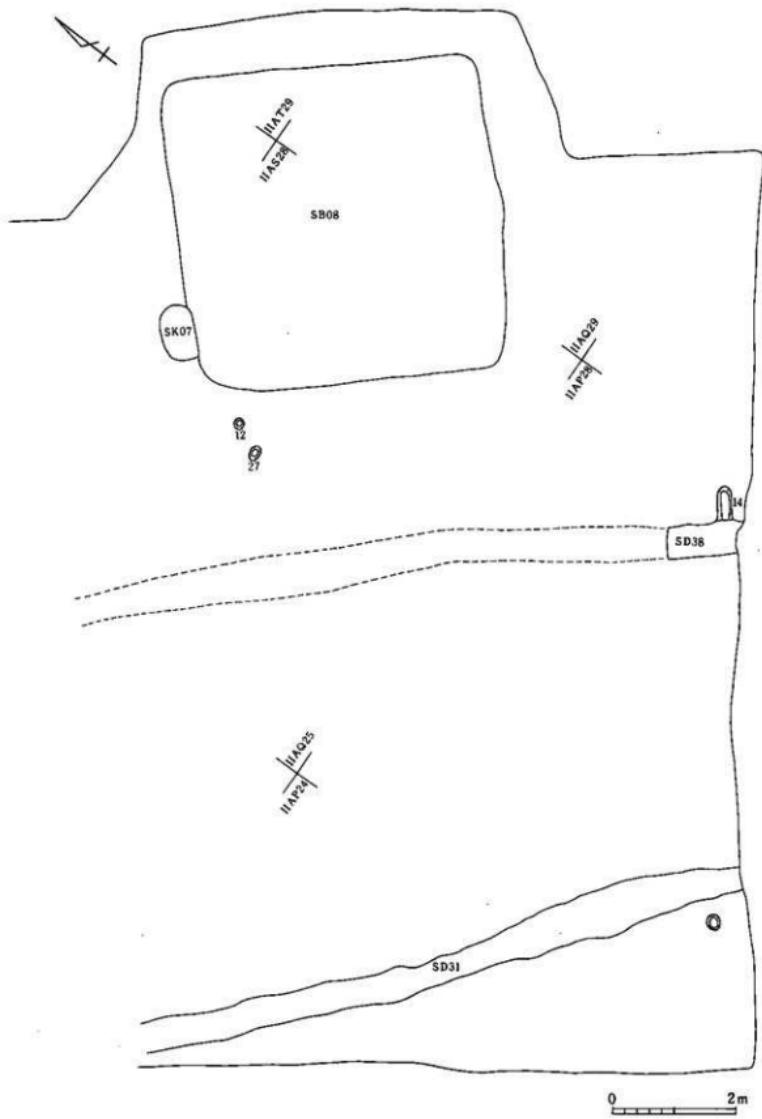
插図 8 SD 29・30・34・36・37



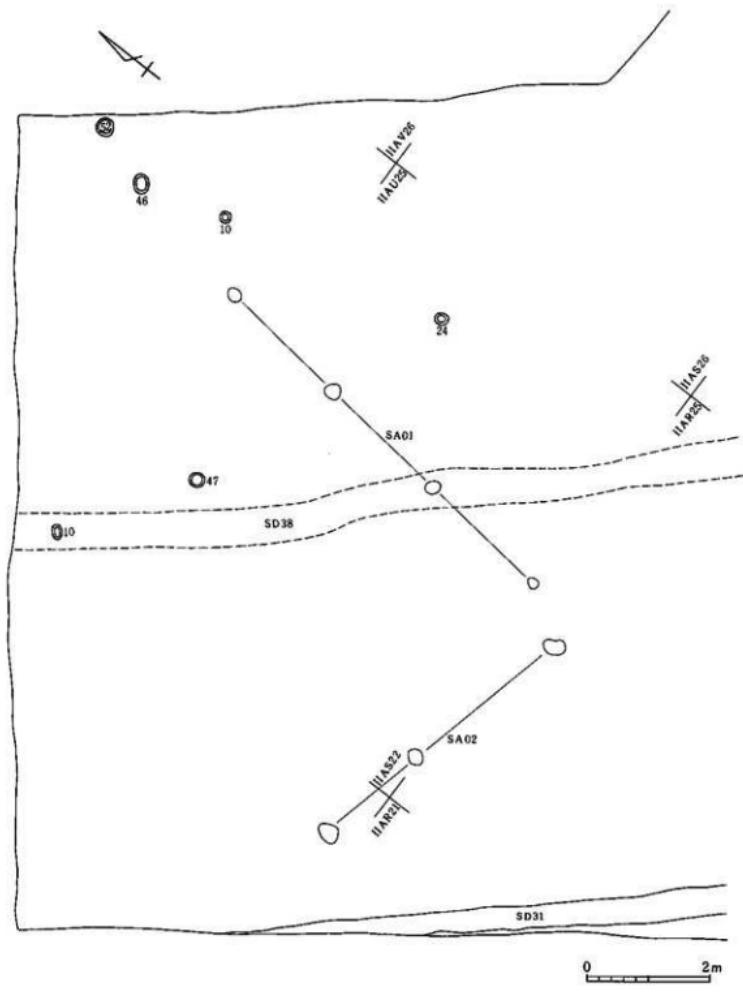
插図9 SD 31~33・35・38

遺構名	図版No	検出位置	規模(長/短/深cm)	形態	覆土	時代	重複遺構	備考
S T01	挿図6	III B V 48	430 / 355 / 40 心心200 / 280	2間×黒褐色土 2間	弥生	後期?	-	側柱の建物址 主軸N55° E
02	挿図6	I A B 49	450 / 390 / 25 心心160.200/160.190	2間×黒褐色土 2間	中世?		-	総柱の建物址 主軸N34° W
S A01	挿図7	II A T 24	心心220	深さ45	4間以上黒褐色土	-	-	主軸N 4° E
02	挿図7	II A R 23	心心180.280	深さ30	2間以上黒褐色土	-	-	主軸N73° W
S K03	挿図7	I A A 44	- / 90 / 5	-	黒褐色土	近世	-	磁器燈明皿
04	挿図7	II A A 6	145 / 75 / 25	不整梢円黒褐色土	-	-	-	焼土混。片上がり
05	挿図7	II A F 4	155 / 140 / 30	不整円形黒褐色土	弥生後	-	-	大形甕出土
06	挿図7	II A F 4	155 / 90 / 25	不整形黒褐色土	-	-	-	
07	挿図7	II A S 27	85 / (65) / 15	不整梢円黒褐色土	-	S B 08切る跡	-	
08	挿図7	II A G 17	330 / 315 / 40	不整梢円黒褐色土	弥生後	-	-	跡多量
S D29	挿図8	IV B V 1	- / 100 / 55	直線状黒褐色土	-	-	-	長軸N18° W 土師甕小片
30	挿図8	IV B X 6	- / 130 / 20	弧状?黒褐色土	-	-	-	長軸N44° W 弥生小片
31	挿図9	II A Q 22	- / 70 / 10	直線状	褐色土	-	-	長軸N49° W
32	挿図9	II A N 18	- / 65 / 10	弧状灰色砂土	近世 以降	-	-	長軸N41° ~ 66° W 両側に木杭を伴う
33	挿図9	I A B 48	300 / 80 / 10	直線状	褐色土	-	-	長軸N55° W 弥生小片
34	挿図8	II A A 0	920 / 120 / 10	L字状黒褐色土	-	-	-	長軸N18° W。N46° E 弥生小片
35	挿図9	II A R 17	- / 35 / 5	直線状?黒褐色土	-	-	-	長軸N60° E
36	挿図8	II A O 15	630 / 50 / 15	直線状黒褐色土	-	-	-	長軸N84° E
37	挿図8	I A A 46	- / 100 / 55	弧状?灰色砂土	近世	-	-	長軸N 8° W。N19° E 近世陶磁器
38	挿図9	II A M 29	- / 50 / 5	直線状	-	-	-	長軸N38° W

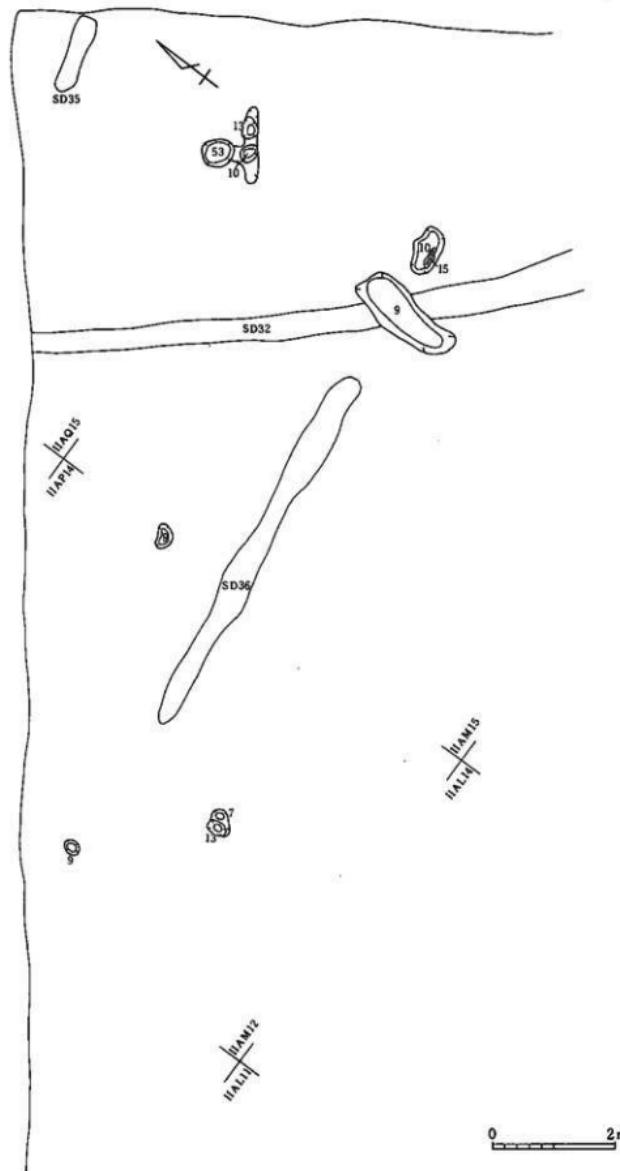
表2 遺構観察表



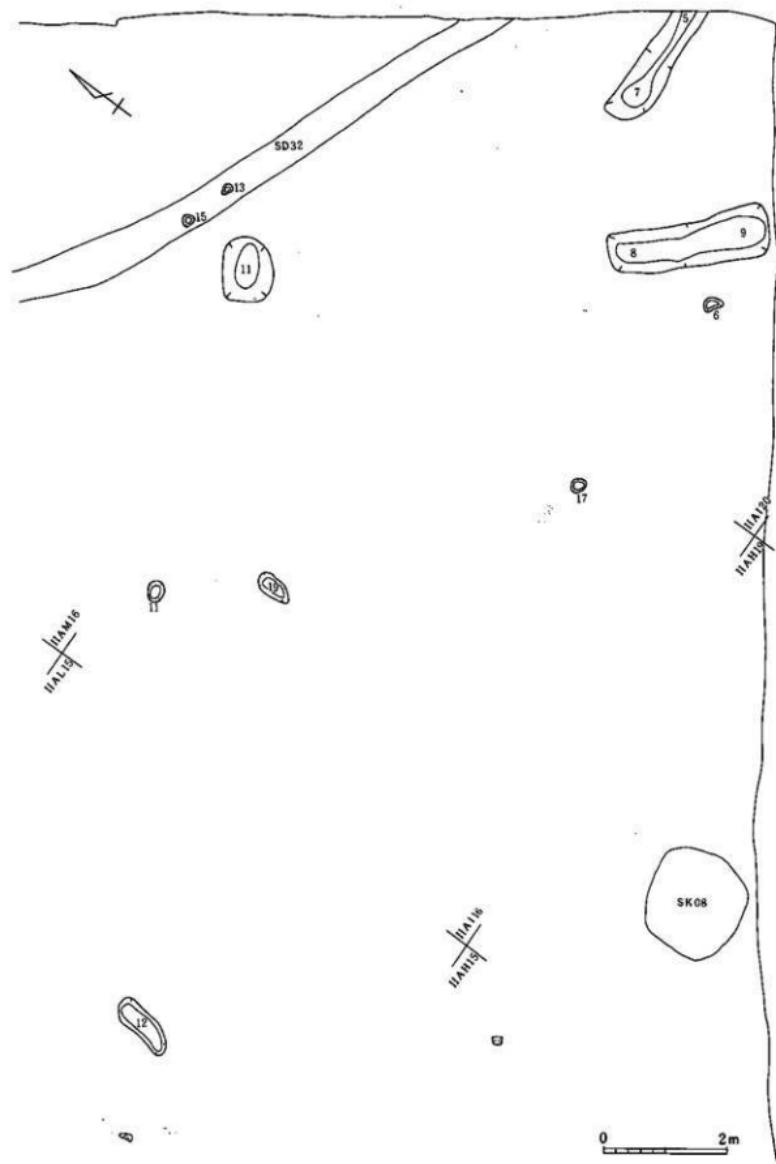
插図10 周辺柱穴平面図 (1)



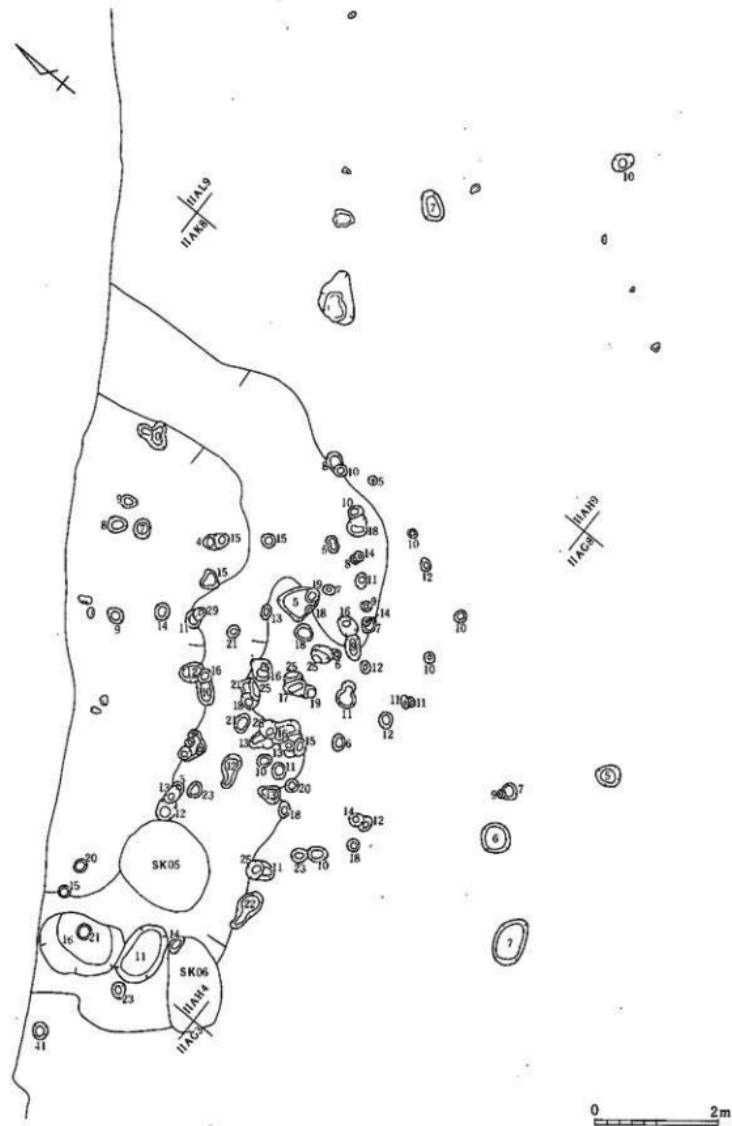
挿図11 周辺柱穴平面図 (2)



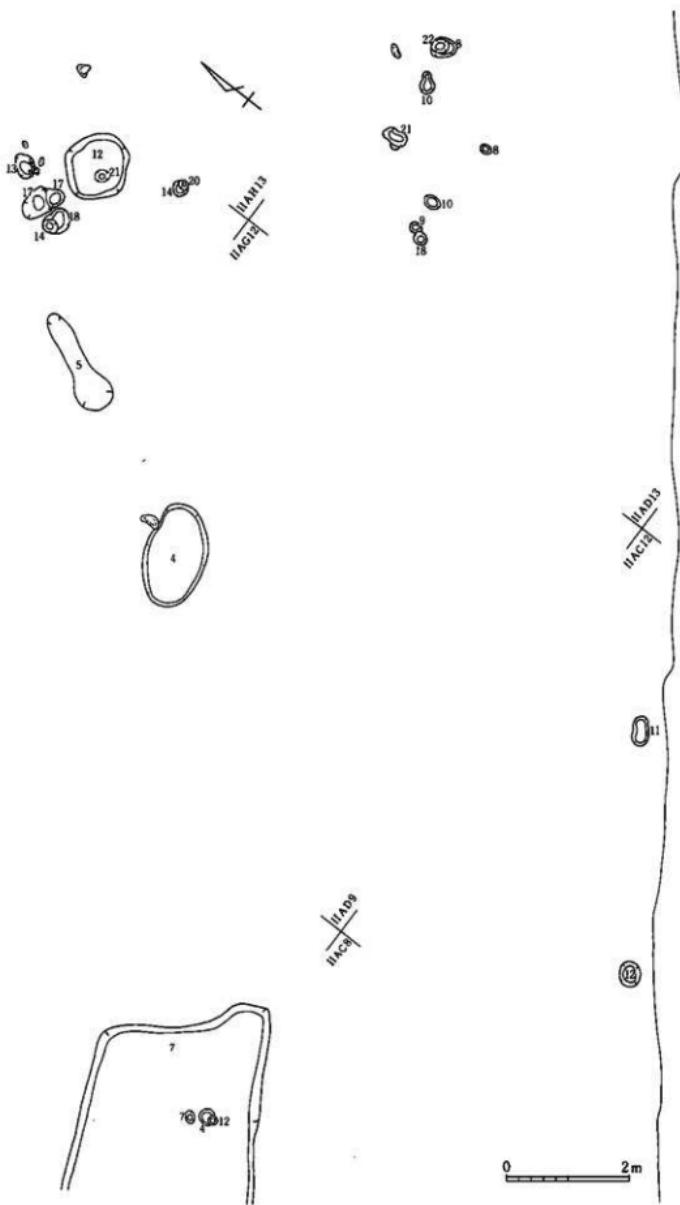
挿図12 周辺柱穴平面図 (3)



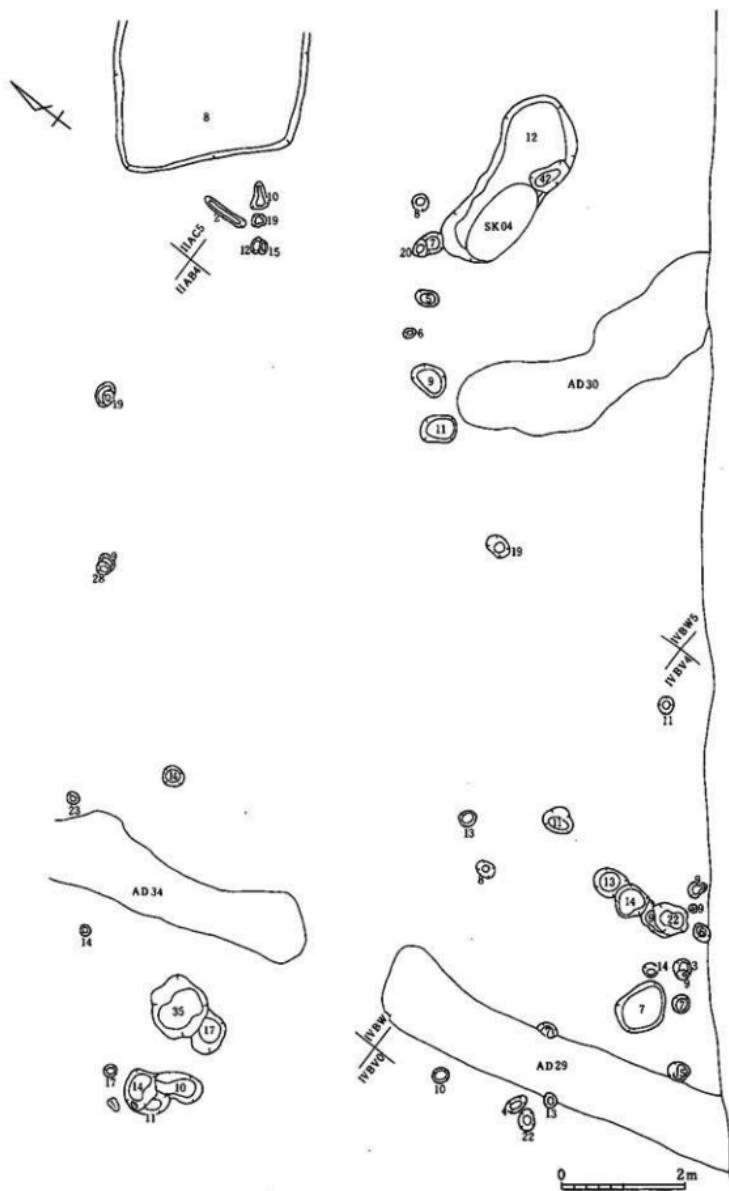
挿図13 周辺柱穴平面図 (4)



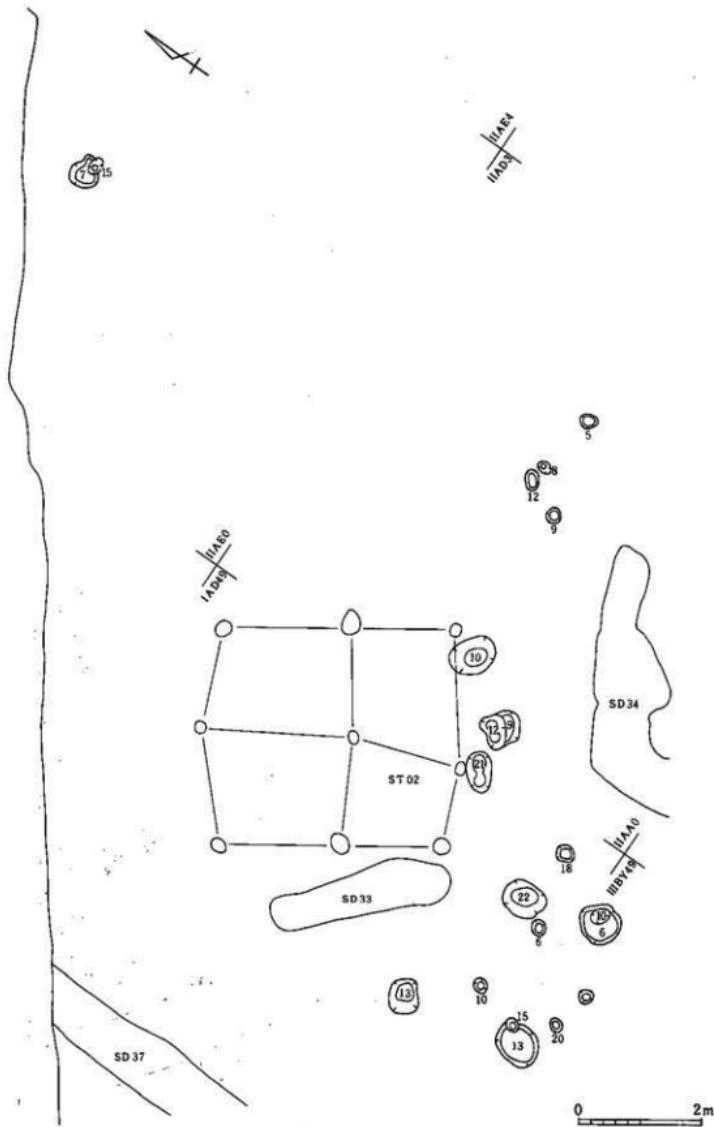
挿図14 周辺柱穴平面図(5)



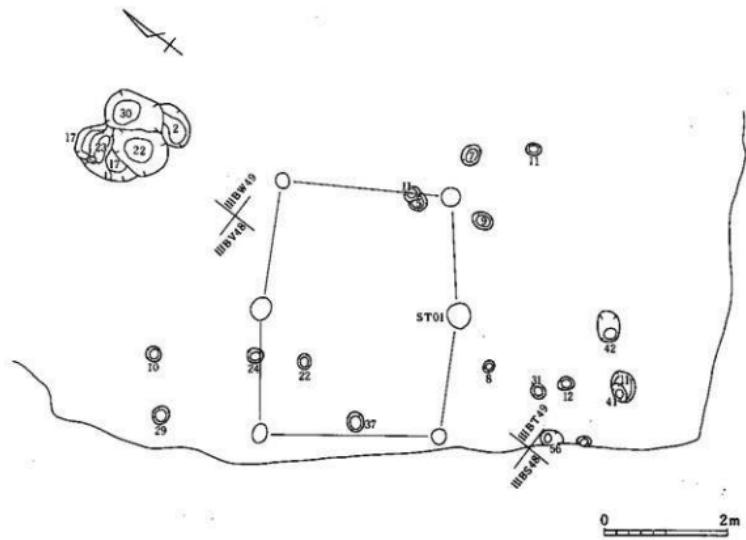
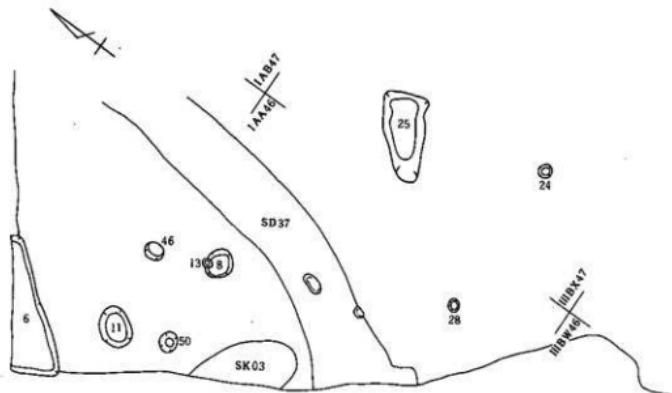
插図15 周辺柱穴平面図 (6)



挿図16 周辺柱穴平面図(7)



挿図17 周辺柱穴平面図 (8)



挿図18 周辺柱穴平面図(9)

## 第IV章 まとめ

今次発掘調査の結果は上述のとおりであり、一般国道153号飯田バイパス路線内の調査や隣接すると田井座遺跡の調査結果と併せると、高位段丘に営まれた集落の消長や景観をある程度描くことができる。本遺跡周辺の集落について時代毎に概括することで、今次調査のまとめとしたい。

### (1) 弥生時代以前

バイパス路線内の調査と同様、弥生時代以前に遡る人間活動の痕跡は、遺構・遺物の断片すら確認されていない。隣接する田井座遺跡においても、前期初頭には、少なくとも6棟以上の安定した集落の姿があったが、後期の土坑が1基確認された他は中・後期には断片的に痕跡がみられるのみである。また、『鼎町史』の記述をみても、縄文時代の遺物の採集は、段丘の縁辺部分に断片的に認められるのみで、台地中央での報告はなく、遺構・遺物が皆無であることから、一色遺跡でもおそらく該期の集落があつた可能性は低い。

### (2) 弥生時代後期

今次調査で検出された竪穴住居址1棟(SB08)は、遺物が少なく後期前半の座光寺原式の壺が混入するが、形態や炉体土器等から弥生時代後期の中島式期の住居址と考えられる。バイパス路線内でも、一部詳細時期不明ながら5棟の住居址が調査されている。SB08とバイパス路線内の3~7号住居址の間に幅30~40mの低湿地が広がっており、一見連続性が乏しいように見受けられる。しかし、SK05から弥生時代後期の大形の甕が出土し、この付近にSB08と同じ黒褐色土が分布して落ち込みがあったことから、壁や床面が確認できなかったものの竪穴住居址であった可能性が高い。また、この部分には中世の小柱穴が密集していることから、中央の低湿地は中世以降に湿地化が進んだと考えられる。また、隣接する田井座遺跡では該期の竪穴住居址の他、側柱のみの掘立柱建物址が3棟調査されており、形態や埋土の類似するST01についても集落を構成する建物である可能性がある。

本遺跡では、田井座遺跡と同様、散在的な遺構の分布状況を示し、集落を構成する遺構の種別も似通っている。しかし、居住域と墓域の在り方に若干の相違がみられる。田井座遺跡では、竪穴住居址・方形周溝墓・溝址等がいくつかの遺構群に括られる。そして、各遺構の時期が詳らかでない状態ではあるが、個々の遺構群が時期を異にするというより、各遺構群内で変遷があると考えられる。各遺構群内では居住域と墓域が隣接しているが、遺跡総体としては両者が錯綜した状況にある。これに対して本遺跡では墓域については断片的であるが、居住域と墓域が隣接して別個に営まれるようであり、言うなれば、田井座遺跡の遺構群のあり方よりはやや規模の大きいものといえる。

本遺跡では後期後半になって集落が始まり、弥生時代以後は集落の連続が認められない。田井座遺跡では、後期前半座光寺原式期から集落が営まれはじめ、後期後半の中島式期になって、住居址数の増加・遺跡範囲への拡大がみられる。そして後期の終末には集落が廃絶する。こうした田井座遺跡の集落の変遷と本遺跡とを重ね合わせると、田井座遺跡の最盛期に本遺跡の存続期間が相当するわけであり、田井

座遺跡における集落の拡大の一環とも考えることができる。

今次調査地点北東側には低湿地が広がり、また、田井座遺跡との間にも幅約100mの湿地帯が展開する。これまで、再三指摘されてきたことであるが、こうした低湿地を生産基盤の一方とし、他方畑作を組み合わせた生産活動により本遺跡の弥生時代集落が維持されたといえよう。ただ、中世まで造構・遺物の空白期間があることからすれば、継続した水田経営の姿はなく、稻作の占める比重は必ずしも高くなく、生産性も低かったことが考えられる。

### (3) 中世

今次調査地点で確認された造構で該期と考えられるものは、S T02、S D29~38、S A01・02や小柱穴群がある。遺物出土はほとんどなく、詳細時期は不明である。バイパス路線調査区内でも、1・2号住居址、方形竪穴1、溝址7・15・16や据立柱建物址と考えられるD区柱穴群があり、広範囲に中世集落の展開があったと考えられる。

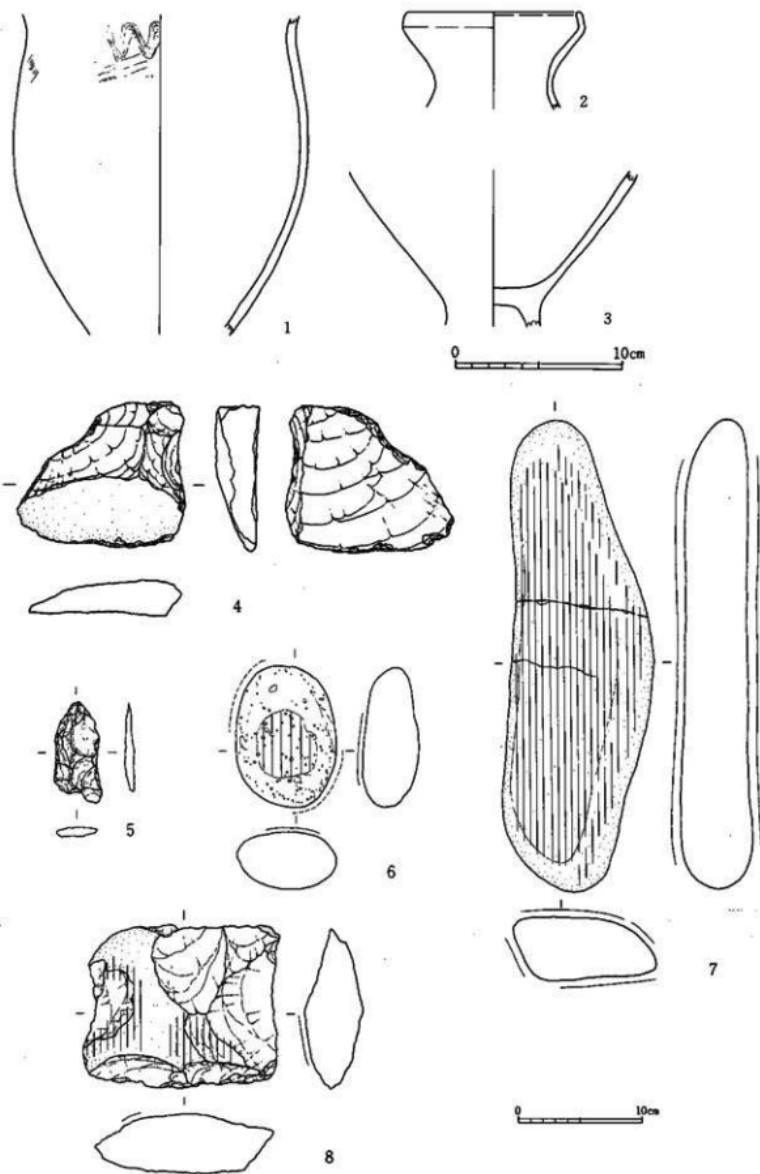
中世前半においては北条江馬氏の地頭代四条金吾が居を構えた「とのおか」に近く、続く中世後期には小笠原氏の拠った松尾城跡と指呼の間にあることから、本遺跡周辺が中世において政経上重要な役割を果たしたことは疑いない。殿原遺跡や矢高原遺跡等にみられるように、平安時代後期以降伊賀良庄では井水の開削を背景として急速に開発が進んだと考えられる。本遺跡周辺でも名古熊井の開削が行なわれたと考えられ、今次調査区中央の湿地化が中世以降とされたこととの関係が暗示される。これまで蓄積された調査結果は断片的であり、具体的に前述の歴史的脈絡の中に本遺跡がどのように位置づけられるか、なお不明といわざるを得ない。

以上のとおり、今次調査の結果、様々な知見が得られたわけであり、これらを正しく地域史の中に位置づけ文化財として活かすために、本遺跡周辺における文化財保護に対する不断の努力が肝要である。

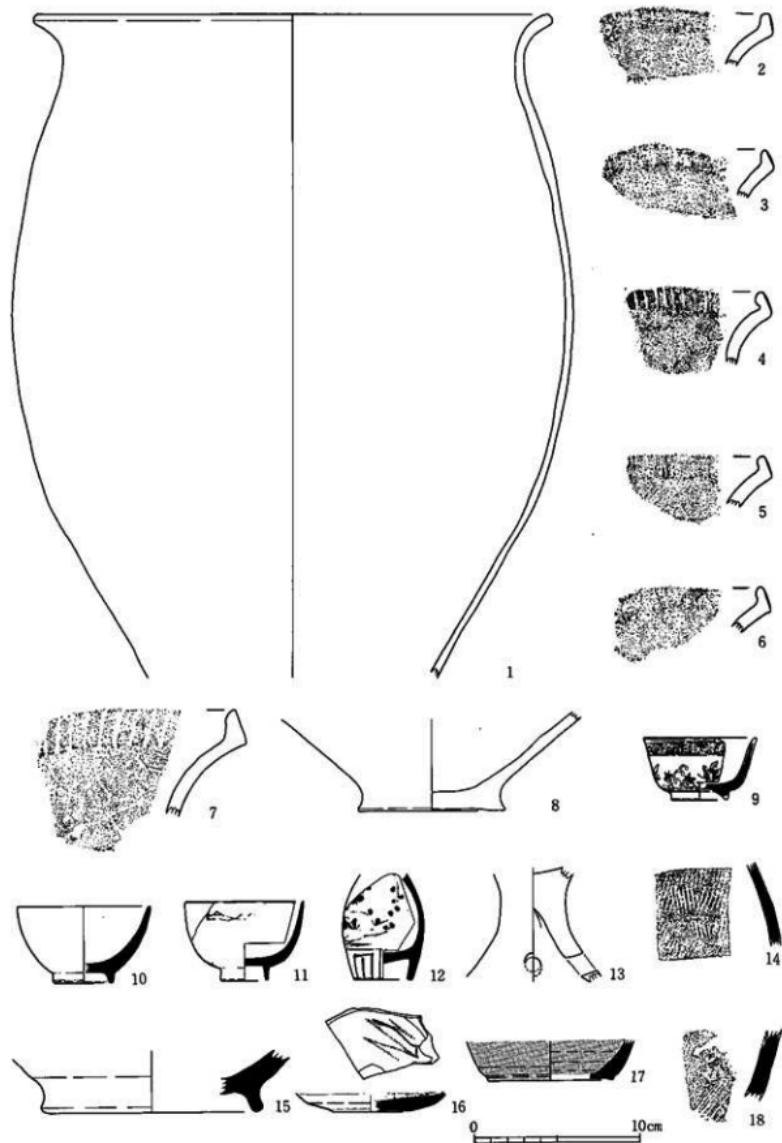
最後に株式会社アライド信州におかれましては文化財保護の本旨に厚いご理解をいただき、調査の実施にあたって多大なる御高配・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

## 引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』  
飯田市教育委員会 1985 『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』  
飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』  
飯田市教育委員会 1988 『田井座遺跡』  
飯田市教育委員会 1988 『小垣外・八幡面遺跡』  
飯田市教育委員会 1989 『下原遺跡』  
飯田市教育委員会 1989 『六反畠遺跡』  
飯田市教育委員会 1990 『日向田遺跡Ⅱ』  
飯田市教育委員会 1991 『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』  
飯田市教育委員会 1991 『田井座遺跡』  
飯田市教育委員会 1992 『田井座遺跡』  
飯田市教育委員会 1992 『柳添遺跡』  
飯田市教育委員会 1992 『矢高原遺跡』  
飯田市教育委員会 1992 『猿小場遺跡』  
飯田市教育委員会 1992 『天伯B遺跡（五輪原遺跡）』  
飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡 物見塚古墳』  
飯田市教育委員会 1994 『日向田遺跡Ⅲ』  
飯田市教育委員会 1994 『矢高原遺跡』  
飯田市教育委員会 1995 『田井座遺跡』  
飯田市教育委員会 1995 『六反畠遺跡Ⅱ』  
鼎町教育委員会 1975 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』  
鼎町教育委員会 1983 『矢高原・八幡原遺跡』  
鼎町教育委員会 1984 『鼎町黒河内遺跡』  
鼎町史刊行委員会 1986 『鼎町史』  
下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第2巻』  
下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第3巻』  
下伊那史編纂委員会 1967 『下伊那史 第5巻』  
下伊那史編纂委員会 1991 『下伊那史 第1巻』  
下伊那教育会編 1985 『親と子の下伊那史』  
長野県教育委員会 1973 『中央道調査報告 一飯田地区一 昭和45年度』  
長野県教育委員会 1975 『中央道調査報告 一下伊那郡鼎町 その1 天伯A-』  
長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 主要遺跡（中・南信）』  
長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』  
長野県史刊行会 1989 『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』



第1図 SB08, SK08 出土遺物 (1~7 SB08, 8 SK08)

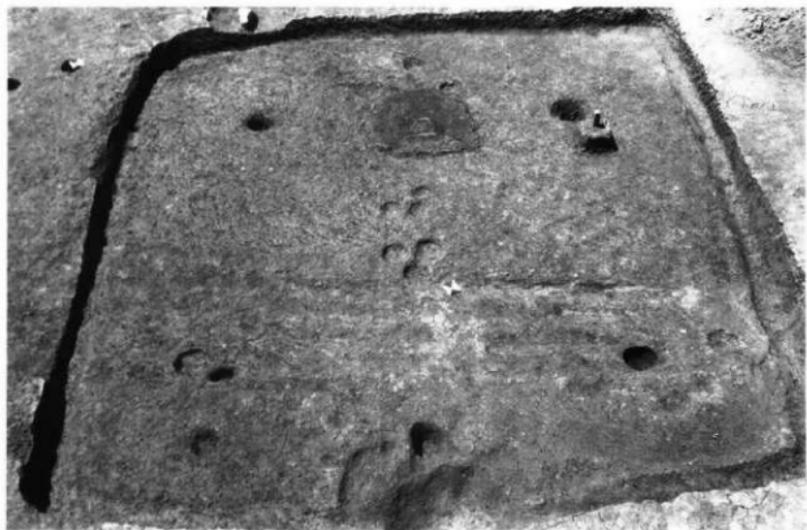


第2図 SK05・08, SD32・37, 遺構外出土遺物 (1~6 SK05, 7~8 SD32, 9 SK08, 10~12 SD37, 13~18 遺構外)

# 写 真 図 版



一色遺跡調査区全景

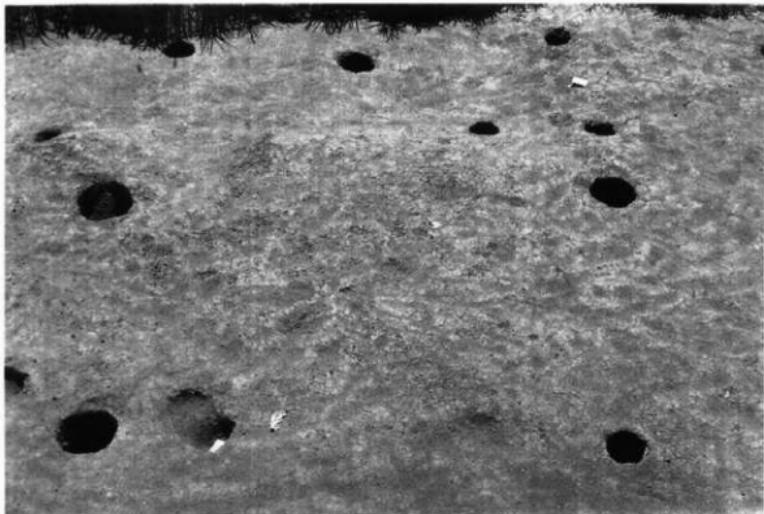


S B 08

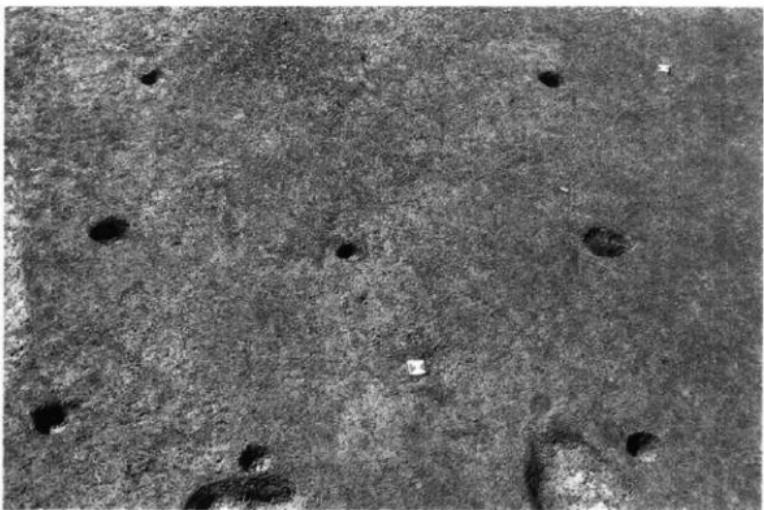


同 炉 址

図版3



ST01



ST02

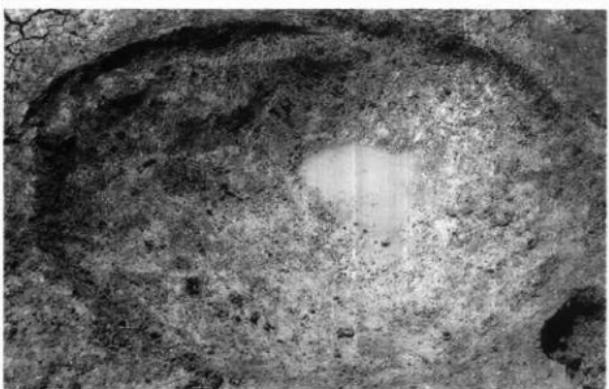


SA01



SA01・02

図版 5





S K08



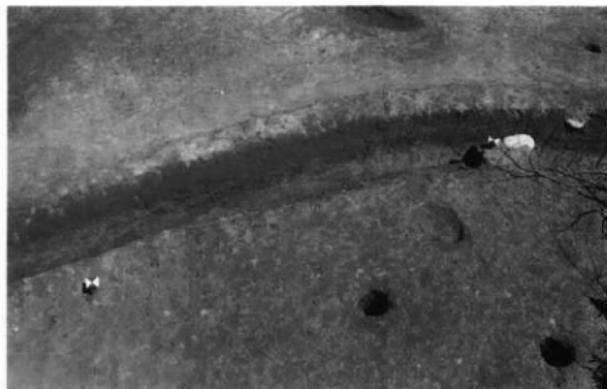
S D29・34



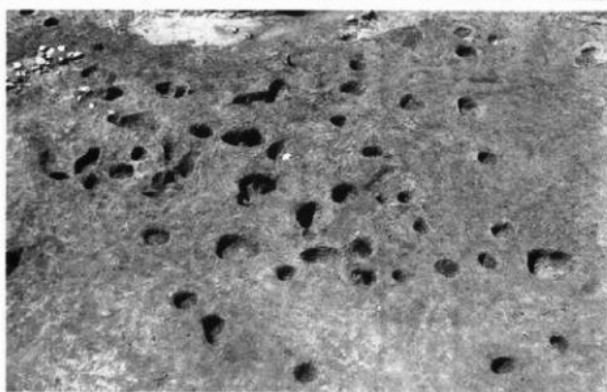
SD32



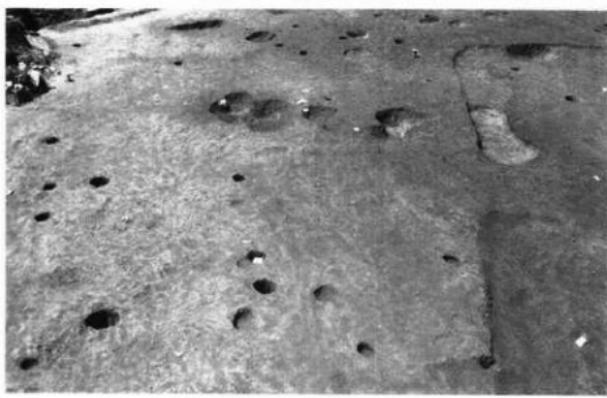
SD36



SD37



小柱穴群



同 上

重機作業風景



同上



発掘作業風景





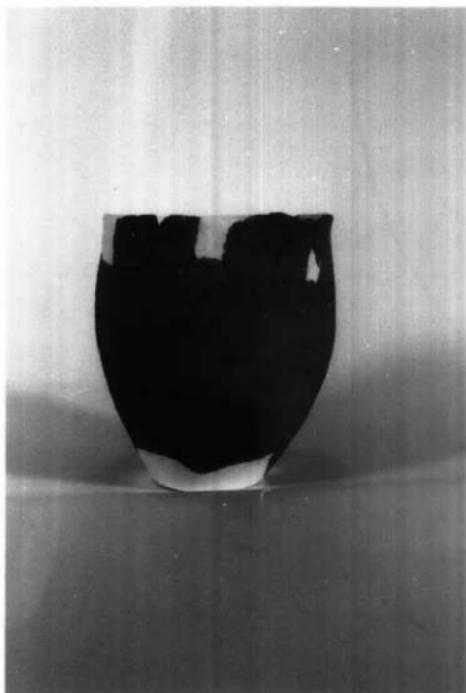
発掘作業風景



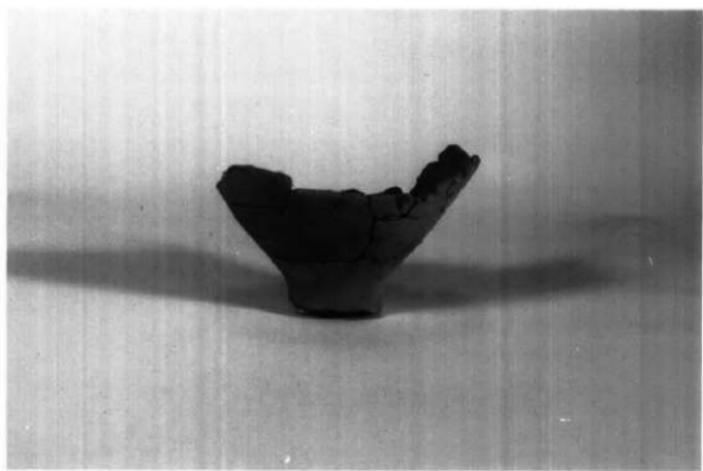
同上

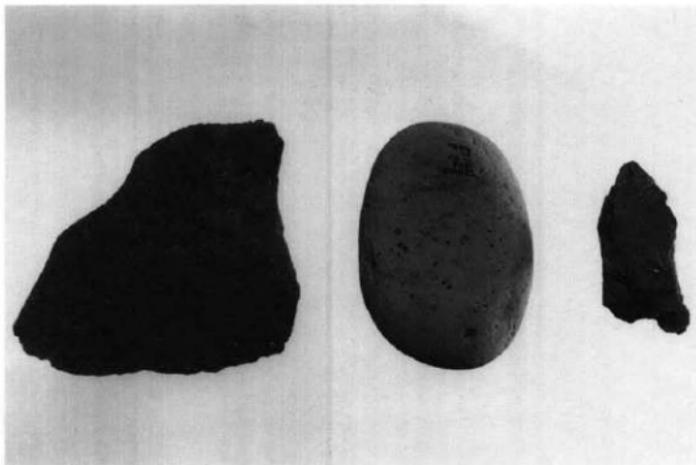


委託測量作業

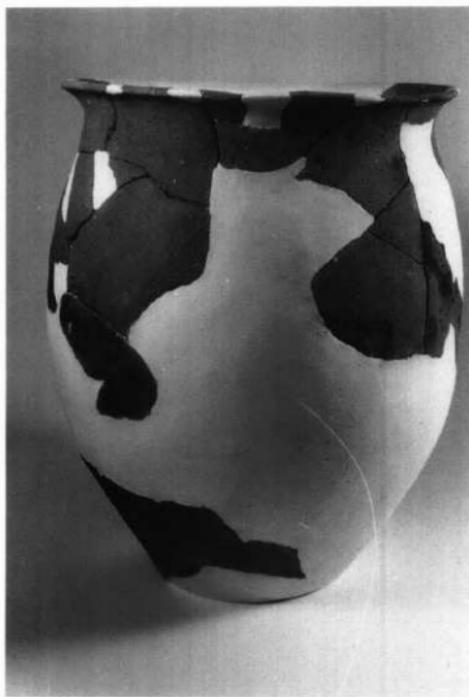


S B 08





S B08



S K05



報 告 書 抄 錄

ふりがな	いっしき いせき						
書名	一色遺跡						
副書名	店舗建設に先立つ埋蔵文化財 包蔵地緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545						
発行年月日	西暦1996年3月日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村遺跡番号				m <sup>2</sup>	
一色	飯田市郷一色	2053	35° 29' 50"	137° 49' 10"	平成6年 6月22日～ 平成6年 7月27日	1,501.2 m <sup>2</sup>	店舗 建設
428他							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
一色	集落址	弥生時代 後期 中世 その他	竪穴住居址 掘立柱建物址 土坑 掘立柱建物址 柱列址 溝址・溝状址 土坑	1棟 1棟 1基 1棟 2基 10条 5基	弥生時代 土器 石器 中世 陶磁器	隣接する一般国道153号飯田バ イパス調査地から連続する集落 の広がりが把握された。	

店舗建設に先立つ埋蔵文化財  
包蔵地緊急発掘調査報告書

二色遺跡

発行日 平成8年3月

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145  
飯田市教育委員会

印刷・製本 ヨシザワ印刷株式会社

